

トピックス

1. 播州日誌「砲弾の先にあるもの」

2. ショートストーリー「土佐のべぐ杯」



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 66

2023年 6月号

芒種～夏至の候

人と自然への感謝

たっぷりと水分を得た植物は
なお一層 緑濃く 新鮮さを増す
うっとうしきや、沈みがちなところには
初夏の花 クチナシやアジサイが寄り添う

年齢を重ねるごとに
多くのものを失う
青春や幼き頃の記憶はあいまいになり
感動や喜びは 山水画の様に淡くなる
焦れば焦るほど
無為に生きる 自分が見えてくる

時間の無きが 深刻さを増し
体の衰えは 時を待たない
もがき苦しむ程に
ますます わが身の醜態を晒すことにもなる

何もかも捨てる覚悟で 余生を考える
ここまで生きたのだから
大いなる力が 生身の終わりを迫るなかで



あくまでも 自分らしく
最後の輝きを放つことを 夢見て
なお生きることに 決めた

衣食住の中で 私の癒やしとなる事やものは
今でも多くある
庭先の 名もない草花の
精一杯の 小さな花に
限りない 生命の力強さと
種を保存する 本能の塊（かたまり）が見える

草花できえ 今日を精一杯生きる
いい加減に生きていいわけがない
早朝 天川東公園の
わたしのワンポイントフィールドに立ち
黄金の サンライズを
胸いっぱい吸い込む
この至福の時こそ
人々への感謝と、大自然への畏敬の念と
祈りの時刻（とき）である。





播州日誌

砲弾の先にあるもの

砲弾の先にあるもの。それは尊い人の死であり、不幸であり、暗黒の未来である。肉親を殺され傷つけられた遺族や家族は、激しい憎悪の炎を燃やし、復讐心の塊となる。敵が撃とうが、味方が撃とうが、砲弾の先には憎しみや悲しみしかない。戦争に勝者はなく殺戮と傷害、破壊と略奪、失われた歳月、残骸だけが残る。閉ざされた未来、絶望の淵がそこに横たわる。

G7が被爆地ヒロシマで開催された意義は大きい。ましてや戦争当事者であるウクライナのゼレンスキー大統領のリアル参加は、世界の注目するところとなり、大きな発信力となった。G7 グローバルサウス8か国の首脳、そしてゼレンスキーが、原爆資料館を視察し被爆者と面談し、被爆者の霊に献花するなど「被爆の実相」に触れたことは特別な意味を持つ。ただヒロシマが発信し続けている「核廃絶と恒久平和」という理想が、いかに困難な期待であるかということを感じ取りにした。核軍縮に関する広島ビジョンでは各国の安全保障のための核の抑止力は正当化された。これは大きな矛盾というしかなく、今回のサミットで具体的な平和回復の方策が示されなかったことは残念というほかはない。世界は約一世紀をかけて、「武力による現状の変更は認めない」という国連憲章にたどり着いた。しかし多くの利益背反の実態は抜きがたく、昨年春のロシアのウクライナ侵攻に至った。原爆資料館の展示の中に、「人影の石」がある。放射線の熱線により石段に影だけが残ったというもので原爆の恐ろしさを今に伝えるものになっている。ゼレンスキー大統領は視察後、芳名録に次のような文章を残している。「(ウクライナは) 歴史の石に影しか残らない可能性があった」

「世界に戦争があるべきではない」。彼の終戦と平和、国の復興を願う叫びにも似た声は世界中の人々の心に響くことだろう。

G7 の評価は各国首脳の核兵器廃絶への歩み寄りであり、分断ではなく協調へのアイデアである。道は険しくとも、今その一步を踏み出したと思いたい。



2023. 5. 22



～南国土佐を後にして～

第11回 「高知編」

特待生試験 テキにカツ

3月の試験に向けて、試験勉強らしきものを始めたのが1月。至ってノーテンキな性格で、何とかやるやろという感じで毎日を過ごしていた。当時NHKで「事件記者」というドラマが放映されていて、漠然と新聞記者になりたいという思いがあった。その方面の学部、学科があったのが、関西では同志社大学、関東では日本大学。東京に行きたい一心で日大を選ぶ。法学部新聞学科、定員120名。先生の勧めもあったので、ダメもとで特待生試験を申し込む。成績段階「B」であったが、生徒会の経験や新聞委員会での活動の実績、本人の熱い希望などいいところ取りの内申書。もちろんクリスマスの飲酒事件には触れていない。自分としてはさすがに無理だろう

と思っていた。受験が近づいても緊張感がなく、たった一校だけの受験。但し、日大に芸術学部というのがあり、試験が3月下旬だったので、落ちたらそこでも受けようと思っていた。本当に情けない受験生で田舎者そのものであった。だからあまり勉強したという記憶がない。ただ受験科目が文系の科目だけだったので心のどこかで何とかなると思っていたのだろう。親の意識も家庭環境もそういう体制になかった。

試験が近づき、宿泊先も高校の先輩の家に泊まることになった。今考えれば随分厚かましい話。当時先輩は新婚ほやほやであった。高知空港から伊丹空港、生まれて初めての飛行機。そして新幹線という大名旅行。受験というより観光に近い心境だった。夕食はテキにカツようにと「ピフテキと豚カツ」のご馳走。流石に疲れて思い出話などする間もなく就寝。

試験当日。どこをどう行ったかなど、もう記憶にない。とにかく先輩夫婦に「頑張って」と背中を押されて出発。試験地は水道橋、法学部の校舎内であったと思う。特待生候補は5人。小さな部屋で一般受験生とは別扱い。午前中筆記試験。文系の教科であったので、何となく答えはできた。問題は面接。でっぴり肥えた教授らしき人からの質問に答える。高知出身という事で、坂本龍馬について多く聞かれた。「薩長連合」「船中八策」「大政奉還」土佐の自由民権運動などなど。今なら100点満点だが、その頃は勉強不足で答えられない。赤面する私に先生曰く「土佐の人なら、龍馬のことぐらい勉強しておきなさい。」みじめな面接の結果、不合格を直感した。先輩宅でもう一泊、ついでに高松に一泊。高知に帰ったのは5日後。家に着いたら友人たちが4~5人家の前において「おまん、なにしょったぜよ、みんな心配しゅうに」「合格、合格やき」ともみくちゃにされ、荒っぽい祝福を受けた。受験の結果は文書で次のように書かれていた。「特待生としては認められず、ただし合格を許す」

特別な感情はなかったが、これで何かと物入りになるなど、親のことを考えた。それでも合格に実感はだんだんに沸いてきた。母校に行って合格を報告する。「ん、福留は合格すると思とった」爾来（じらい）高校の先生はいい加減だと思ふようになった。

YTさんに「サクラサイタ 17 ジ ハリマヤバシニテマツ」と電報を打つ。すっかり落ちたと思込んでいた彼女は、会った瞬間、半泣きの状態。合格だと知ると、心配して損をしたと言いながら、笑顔になった。京町、帯屋町を歩いて大橋通りあたりで食事をする。思い出深い一日になった。

ふわふわとした受験生活、こんなに勉強しない受験生がいてもいいのだろうか、自分でも思った。

新連載 社労士 野口 亮 がゆく

日課にしている早朝ウォーキング。天川の土手を直線で800m程歩くところがある。野口はいつもそこで今日一日の予定を考えたり、懸案事項について考えたりする。今朝も難問解決の糸口をつかもうと、頭の中を整理していた。事業主からの依頼は、労働時間の段階的短縮と、その後の退職勧奨。勤続年数15年になる従業員のAさん。業種は特殊印刷、担当業務は「編集」。半年前からパーキンソン病になり、次第に日常生活に影響が出始めていた。薬の服用が必要で、薬効が出ている間は安定している。概して午前中はよいが、午後からは極端に力が落ちる。手にしびれや震えがあり、パソコンのマウスは両手を使って押さねばならない。自覚はあるが生活のこともあり、なお就業の意志は固い。成人した子供が1人、奥さんは専業主婦。ざっとそんな状況でこれまでの会社への貢献は認めつつも、円満に退職を勧めたいというのが事業主の本音。Aさんは50歳。職人気質でプライドも高く仕事はできていると思っている。特に午後からの仕事の問題で、「編集」という大事な部署でもあるので納期など仕事への影響も大きい。最近、納期や仕上がりについて、クレームがぼつぼつ出始めている。



さてと、誰も傷つけずにうまく話をまとめるのにどうしたらいいか。野口はここ数日少し頭を痛めていた。今日は午後に奥さんを交えての話し合いの時間が設けられている。

以下 次号

創作 ショートストーリー 土佐の「べぐ杯」

土佐の高知に住み着いた妖怪、しば天狗、通称「しばてん」。今日ものんびりと水辺で甲羅干しなどしておりました。通りがかった村人たちのうわさ話。

「困ったもんじゃのう、何言うても言うこと聞かんきにゃ」

「ちっとでも働く気がありゃまだしも昼間っから飲んだくれて、酔っぱらって、管まくことがしよっちゅう」

「あれではしっかり者の嫁はんも、つつ無いのう」

「何とかならんじゃるか」

一升酒、昼夜の境なし、底抜け。人呼んで、「のん兵衛の熊（熊五郎）」

それを聞いた、しば天の胸に正義感がムラムラと膨らみ、その夜から手ぐすねを引いてチャンスを待っていた。とある夜更け、くだんの熊がふらりふらりと、千鳥足。



「酔狂もいい加減にせい」としば天。熊の前に躍り出て、両手を広げて通せんぼ。

「うむ、お前はなんじゃ、何者じゃ」

「おんしゃ何なら、おらしば天よ」

「オンちゃん酒飲も飲もうちや」

「なに、酒、酒飲ましてくれるが」

「そうよただし、勝負ぜよ。俺が勝ったら今後一切酒飲んだらいかんきにゃ」

「覚悟してかかってきいや」

「なにくそ、河童のくせに、おまんに負けるわけがないじゃろが」

一升入りの徳利が2本、でんと前に置かれる。

「どちらが先にカラにするか、それが勝負じゃきにゃ」

用意されたのが、土佐の名物「べぐ杯」。大き目のべぐ杯が二つ。べぐ杯とは底が丸かったり、天狗の鼻のように大きくふくらんでいたり、底に穴が開いていたり。要するに底がそんなんやから、下に置けない。つまりは酒を注いだら、一気に飲みするしかない。土佐に古くから伝わる酒席での遊び。相当の酒豪でなければ、途中でケツを割ること必定。

さてさて勝負が始まった。注いでは飲み、飲んででは注ぎ。言いたい放題、悪態をついたりもうつかみかからんほどの修羅場。一升では勝負がつかず、二升、三升と酒徳利がカラになる。

夜も白々と明けるころ、平気の平左のしば天と、赤くなったり青くなったり、青息吐息の熊五郎。どうみても勝負あった。くだんの熊、すっかりしょげこんで

「小さい時から、酒は鯨が飲むばあ、飲んできたけど、おまんじゃ負けた」

「しばらくは酒をやめて、働くけん、許しとうぜ」

しかも腹痛がして、下痢、嘔吐、すっかり醜態を晒し、村人たちの笑いの種に。

下痢して当然、熊が飲んだのは沼の上澄みの水、そりゃ下痢もどおり。腰も抜けんばかりの体たらくに、さすがの熊も意気消沈。酒をやめて働きだしたそうな。

「まっことよかったにゃ」「まっこと、まっこと・・・」